

# 岡山城跡本丸発掘調査現地説明会資料

1994.3.12

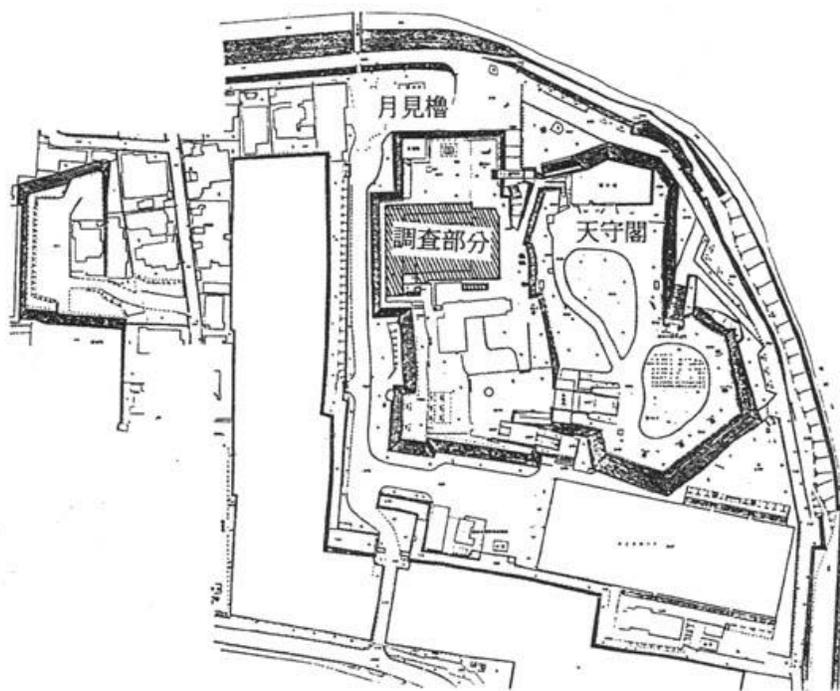
岡山市教育委員会

## 1. はじめに

岡山城跡の本丸一帯は、鳥城公園として復元天守閣と共に、広く市民に親しまれていますが、昭和62年に国の「史跡」に指定されたのをうけて、遺跡としての観点からの整備をめざす事になりました。その第一歩として、まず地下の遺構の有無や内容を把握する必要があります。このため、一昨年から発掘調査にとりかかり、昨年10月に始めた今年度の調査も、いよいよ大詰めを迎えています。

発掘を行っている場所は、本丸の内でも天守閣から西に一段下がった中の段で、本丸内で唯一の現存建物である月見櫓の周辺です。大名池田家の私の御殿が天守閣前にあったのに対し、ここは、「表書院」と呼ばれた岡山藩の政治を行うための公の御殿が、ほぼ江戸時代を通じて建っていた所で、内でも今年の発掘地は、その北半分に当たります。

確認された遺構は、表書院の屋敷関連のもの、表書院と同時に高石垣の縁に建っていた櫓など軍事施設関連のもの、それらより深い層でみつかった江戸時代前期を遡る石垣や建物など、に大別されます。



第1図 岡山城と調査区の位置

## 2, 表書院の時代の遺構(江戸初期から幕末)

表書院や月見櫓以外の櫓は、明治維新の時に取り壊され、その後、旧制の岡山第一中学の校舎などが建ち、また戦災の瓦礫を埋めるため大穴があけられたりして、遺構の一部は既に損われています。しかし、明治維新以後、そのつど地上げをしてこの地を利用した事から、江戸時代の遺構は特に発掘区の西側で良く残っていました。

江戸時代の様子は、岡山大学池田家文庫などにある絵図から窺い知ることができます。これらによると、表書院は玄関を南に持つ延850畳敷きの大御殿で、発掘区の北側付近に最も奥むきで招雲閣と呼ばれた棟、同じく中央が中庭で池や能舞台、東が台所。高石垣縁の南角に伊部櫓、北角に数寄方櫓、その両者をつないで多門があった事になります。実際に発掘をした所、様々な遺構がみつかりましたが、それらの配置は良く絵図と一致しています。なお、絵図は元禄年間、1700年のものが最も古いのですが、それよりも古い時期の遺構も一部確認できます。

中庭の池は、漆喰で固めて底としたもので、黄 - 赤 - 白と上塗りを繰り返しています。はじめは西側の半分だけでしたが、能舞台が1700年代前半に撤去(後楽園に移転)された時、東に拡張されています。中島に井戸横の桶からとみられる給水用の備前焼土管が取り付け、西には排水用土管が延びています。能舞台のものとみられる礎石の並びは、本体部分が3間四方(6m)のもので、先よりさらに古い池の可能性のある漆喰をはった窪みを埋めたてて築いています。

中庭北側の建物に関しては、軒の雨落とみられる円礫を充填した溝や東石が確認できます。また、西には木箱を埋めた穴と玉砂利を詰めた穴があり、それぞれ大・小用の便所とみられます。近くで、円礫敷きの穴の中に植木鉢の様な形の焼物を逆さに置き、漆喰で固定していました。上に恐らく手洗鉢があり、その排水用施設とみられます。この程度では、そんな良い音がしたとは思えませんが、「水琴窟」に近い構造です。なお、雨落溝の下で元禄絵図より古い建物の礎石列も見つかっています。招雲閣の前身的な御殿のものでしょう。

西の高石垣の縁の二つの角櫓と多門は、石壘に跨がって建っていたものです。柱や土壁の乗る礎石のほか、床の敷瓦や間仕切の石組などが確認されます。また、軒下の排水溝は、外石垣に抜ける暗渠へ続く桝部があり、以北が花崗岩に対し、以南は豊島石をくりぬき隣とホゾを切って組んでいます。

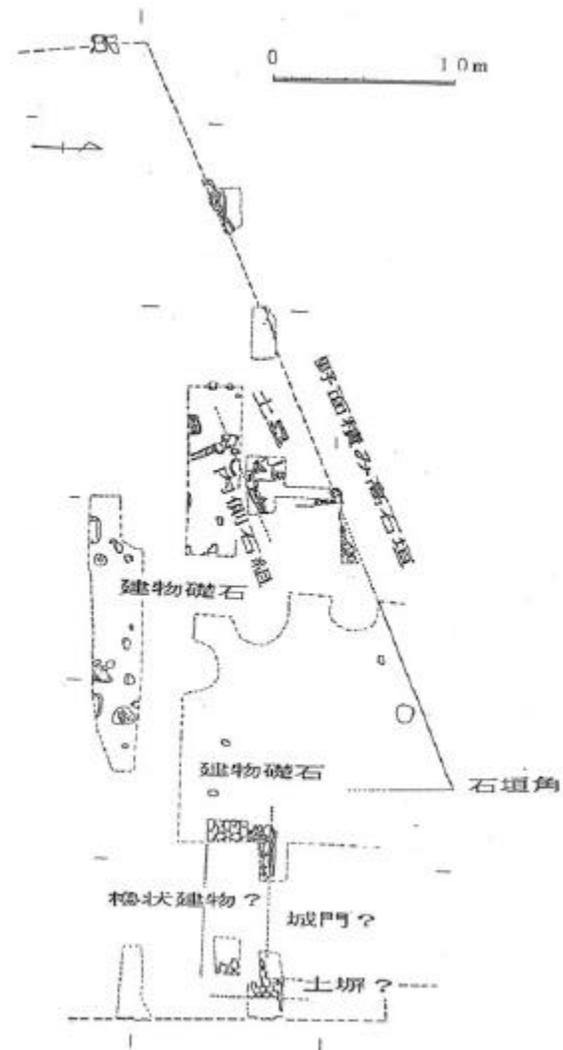


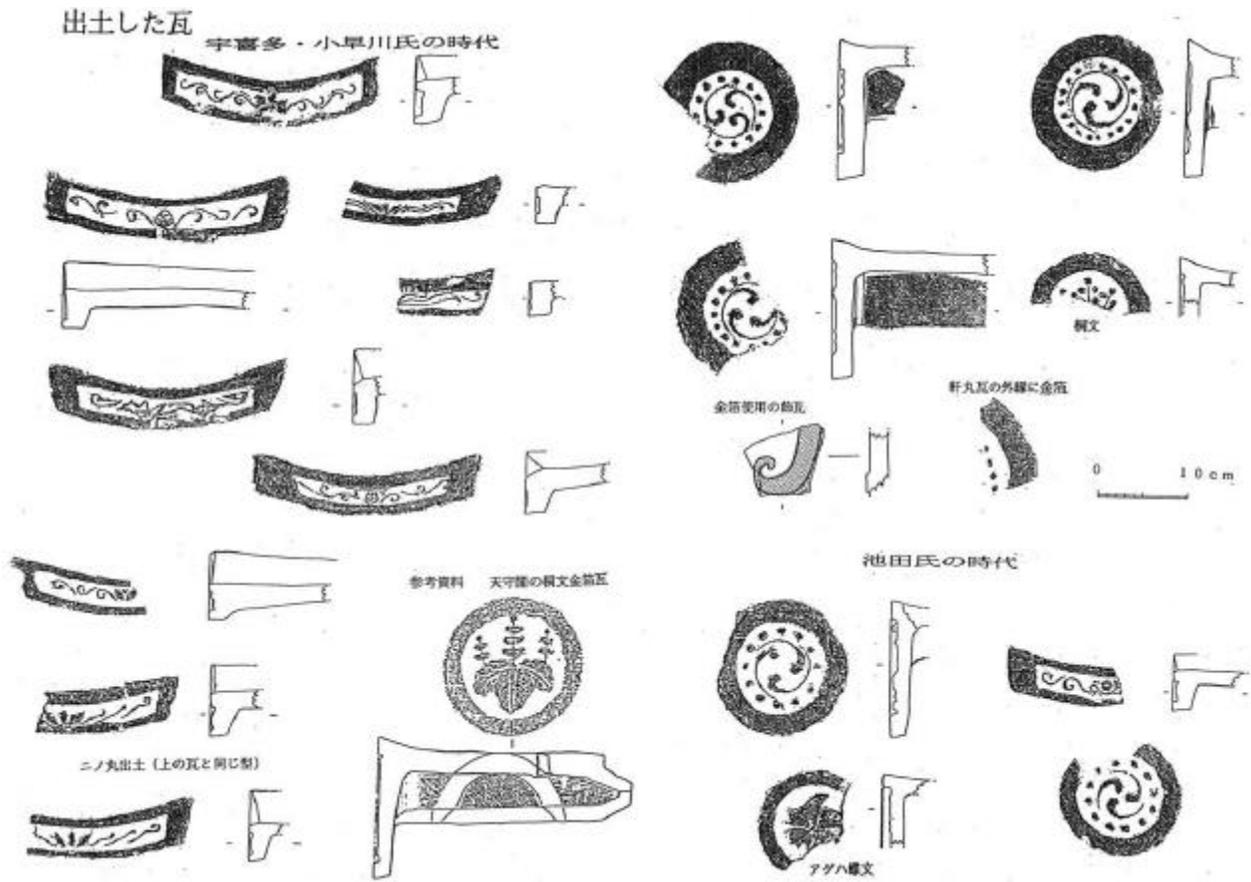
### 3. 中段が拡張される以前の遺構(築城から江戸初期まで)

中段は、1591年から1597年にかけて宇喜多秀家が築城した当時のものではありません。表書院の遺溝の下層で、古い石垣が確認されました。それを川砂で埋め立て、新たに築いた石垣の角に建っているのが月見櫓です。月見櫓は、記録から池田忠雄が藩主の時(1620年代頃)に建てられたものです。櫓は石垣と一体ですので、増築もこの時のものでしょうし、各土層から出土した遺物の年代もこの考えを支持しています。

新石垣の石材は矢で割り、ノミで面を整えているのに対し、この石垣の石は加工度の低い野面石で、大きさも不揃で古い特徴を備えています。発掘区の東端付近に鋭い折れ角があり、そこから南西に40mほど延びて鈍角でおれ、今も露出する部分に繁ります。一方は、鋭角の折れから城内側に引き、また折れて東西に延びます。一帯の石垣上では櫓状の建物や土塀のものと思われる敷石や礎石が確認され、細かな構造は不明ですが、廊下門の前身的な門があった可能性があります。また、鋭角から南西に延びる直線部で、石垣と4m程離れて城内を向く石組が見つかり、間に土塁があった事も解りました。

古い石垣を埋める砂は、本来から段の内であった所にも盛られますが、その下数十センチの間に、最低4枚の生活面があり、各々で建物の礎石などを確認しました。そのうち、最下のものは、出土遺物からも築城時の可能性が高いものです。従い、確認石垣は築城時まで遡りうるものです。一方、築城後40年足らずの間に、度々建物を建て直した事になり、内部の様子が目まぐるしく変遷した様子が窺われます。実は、石垣そのものにも補修の痕があり、石垣縁の土塁も中段の拡張時には既に埋まっていたし、敷石も築城時よりは遅れる様です。以上は、今だ戦国時代と言う軍事的背景と、城主が城の改変にたいして表書院の時代ほど政治的に統制されていなかった事と結び付くものと思われます。





築城時のものとみられる瓦の内には、金箔をはったものが少量あり、桃山時代の時代性ととも、秀家の秀吉との親密な関係が偲べれます。天守閣以外の建物にも掲げられていたけれど、ひとつ屋根の内では極めて限定された部分に用いられていた様です。一般の軒瓦の文様は、桐はほとんどなく、これもその使用は本丸内でも限られる様です。細かくは多種多様で、統一されていませんが、姫路周辺の瓦との関係を匂わすものがあります。また、二の丸出土品と同じ型のものがあり、これらが特殊な建物専用のものでない事や、当時、岡山城下全域を覆う規模での瓦の供給体制が確立していた事が窺われます。